

授 業 科 目 の 概 要

(農学部 食農ビジネス学科)

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(概要)</p> <p>自然を改変しながら生物資源を活かし、人類の衣食住を支えてきた「農学」は、人間の諸活動を支える根幹的な学問である。「農学」には持続可能で豊かな人間社会と地球環境の創出を目指して、課題を見出し対応するミッションがある。「農学」は生命を支える食料の科学であり、生命科学とも位置付けられる。さらには、「農学」は生産、加工、流通の6次産業に食栄養を加えた24次産業的視点で捉えることができる。農と食をとりまく環境は大きく変化し、「農学」における食栄養科学・健康科学の重要性も認識されている。本講義はこうした問題意識からテーマを設定し、オムニバス方式の講義により、受講者が「農学」とは何かを理解するとともに、「農学」のミッションに対応する「使命感」、「農学」的視点がもたらす「俯瞰力」「実践力」に関心をもち、主体的に課題を意識することができることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(25 久保康之／1回)</p> <p>「農学を大学で学ぶとは」をテーマに講義する。「農学」は、自然を改変しながら生物資源を活かし、人間の諸活動を支える根幹的な学問である。持続可能で豊かな人間社会と地球環境の創出を目指して、私たちは何を学び、何をすべきか、「農学」の世界観を俯瞰し、学修する。</p> <p>(29 寺林敏／1回)</p> <p>「農学と社会」をテーマに講義する。「農学」は、安全な食料生産と食料の安定供給、自然環境の保全、食を取り巻く多様化・複雑化する社会への対応、新しい作物生産の場とその生産技術の開発など、社会からの求めに応え、解決する使命を担っている。「農学」が社会とのかかわりの中で、いかなる研究が社会に貢献してきたか、と同時に「農学」の発展と可能性について学修する。</p> <p>(22 川崎通夫／1回)</p> <p>「農業生産技術の進歩」をテーマに講義する。農業生産技術の進歩は、人口増加、自然環境変動、および、社会変化に伴う農業生産課題を解決していく上で重要な要素である。フィールド栽培、施設園芸、植物工場、および、AI(人工知能)やIoT(モノのインターネット)を活用したスマート農業などに関する農業生産技術の進展について学修する。</p> <p>(3 田中樹／1回)</p> <p>「国際農業と開発援助」をテーマに講義する。世界の農業の多様性を踏まえ、発展途上国における農業開発と、それに対する援助のあり方を学修する。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(20 小保方潤一／1回) 「ゲノムと農学・生命科学」をテーマに講義する。生物の設計図を読みたい、というのは生物学者の長年の夢だったが、ゲノムの解読技術の飛躍的な発展によって、それは現実のものとなりつつある。ゲノム科学の急速な発展が、農学・生命科学や私たちの生活にどのような影響を与えつつあるのかを概説する。</p> <p>(16 石川幸男／1回) 「農業とケミカルエコロジー」をテーマに講義する。すべての生物は、同種または他種の他個体と相互作用を及ぼしあいながら生きており、この相互作用の仲介役として化学物質が大きな働きをしている。植物－昆虫、昆虫－昆虫間の相互作用における化学物質の働きについて、その害虫管理への応用を含めて概説する。</p> <p>(19 奥本裕／1回) 「作物改良のための情報科学」をテーマに講義する。現代の農業は近代育種が改良してきた品種を基盤に成立している。近年のゲノム解読技術と画像解析技術の急速な発展は、育種におけるDNA情報解析と高速フェノタイピングの利用を強く後押ししている。育種の現場で利用が進められているゲノム情報と圃場データ処理を利用する情報科学について概説する。</p> <p>(17 井上亮／1回) 「動物生命科学の新展開」をテーマに講義する。動物を対象とした研究は、農学においては産業動物の生産性向上のため、食品、医療においてはヒトの健康維持・増進、疾病予防・治療のために行われる。これらの動物を対象とした研究には遵守すべきルールや法令が存在する。これら動物を対象とした研究に関する現状を学修する。</p> <p>(30 豊原治彦／1回) 「地球環境と海洋科学」をテーマに講義する。水産業は一次産業の中でも特に天然依存性が高いことから、資源維持のために健全な海洋環境の保全が必須である。最新の増養殖技術の活用も含め、地球環境の保全と海洋科学の進展について学修する。</p> <p>(43 吉井英文／1回) 「食品科学と農業」をテーマに講義する。農林漁業者（1次産業）が生産する農水産物の元々持っている価値をさらに高め農林水産産業を活性化させるためには、食品加工（2次産業）は必須の技術である。最新の食品加工にかかわる食品科学技術の進展について学修する。</p> <p>(44 和田大／1回) 「微生物と食品」をテーマに講義する。東洋、西洋を問わず、食品製造に微生物を利用することは長く行われてきた。農産物の2次加工としての微生物利用について概説する。</p> <p>(24 喜多大三／1回) 「食文化と多様性」をテーマに講義する。日本の食文化は大きな変革期にきており、食生活の大部分を外食産業に依存する家庭が急増している。本来、日本の伝統的食文化である「お茶」の歴史、伝統および特質について学修する。 養学の観点から健康問題を考える。</p>	オムニバス方式

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	農学概論	<p>(26 黒川通典／1回) 「食栄養科学と健康」をテーマに講義する。現代の栄養事情は欠乏と過剰の二極化といわれている。社会の仕組みが複雑になっている今、社会のあらゆる側面を視野に入れながら、人間栄養学の観点から健康問題を考える。</p> <p>(1 小野雅之／1回) 「食品産業の役割とこれからの方向」をテーマに講義する。消費者への食料供給において重要な役割を担う食品産業、特に食品流通業を取り上げ、その役割とこれからの展開方向を学修する。</p> <p>(2 北川太一／1回) 「これからの食と農を考える」をテーマに講義する。今日の食と農の状況を踏まえながら、これからの食と農の共生のあり方とその方向を考える。</p>	オムニバス方式
		農学基礎演習	福井県と三重県にある農業体験施設を利用し、2日間の演習を行う。主に、我が国のイネ生産と消費の現状、水田の構造、稲作を成立させる農業技術並びに自然環境要因、水田の多面的価値、稲作文化等について学修する。演習内容として、春期の田植えと秋期の稲刈りを行う。日本の主食であるコメの栽培を学び、イネ栽培を体験することで、水田の構造、日本で水田稲作が成立する要因、稲という植物の生育特性を深く理解し、我が国における今後の稲作の在り方について学ぶことを目的とする。	集中・共同
		グローバル農業演習	私達の食生活は、我が国の食料生産だけでは決して支えられているものではなく、他国における食料生産への依存度は高まる一方である。海外に10日間滞在し、その地域や国の農業についての学修や視察により、茶などの工芸作物を含む様々な農作物、野菜や花などの種々園芸作物が他国で、どのような気象・土壌環境で、どのような栽培技術で生産され消費・利用されているかを、それら地域の歴史的、文化的背景、社会情勢の理解とともに学ぶ。	集中・共同
		スマート農業演習	日本農業における就農人口の減少、高齢化、激しい気象変動と異常気象等、農園芸作物生産を取り巻く環境は厳しさを増している。そんな中、高収量・高品質、安定生産、省力・軽作業化、省エネを実現するためのロボット技術やICTを活用した新しい農業スタイル「スマート農業」が動き始めている。本演習ではスマート農業について、その理論と実際を学び、日本農業がかかえる課題と「スマート農業」の可能性とその重要性について正しく認識させる。	共同
		農業気象学	さまざまな気象現象の基礎的な特徴と発生原理等について講義を行い、気象と動植物との関わり、農業や人間生活との関わり等について、具体的な事例を示しながら解説する。それにより、大気の組成や構造、放射過程・熱輸送過程、高・低気圧や前線とその動き、異常気象の発生原理、大気大循環、地球温暖化を含む気候変化とその影響など、さまざまな時間的・空間的スケールで起きる気象現象や気候システムについて、そのメカニズムを修得し、それらの農業への影響や対策等について現実的に考察することが可能となる学力を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	共通群	森林生態学	森林のあるところに文明が起り、森林がなくなれば文明も滅びたように、昔から人間は森林を利用して生きてきた。日本は、国土の67%を森林に覆われる世界でも有数の森林国である。森林は、近年の環境問題を解決するための、また持続可能な資源の開発を行うための、大きな鍵となる。本講義では、森林の生態についての知識を得ることを目標にする。また森林生態学を研究する方法や、環境の計測などに関する理解を深める。さらに森林と人間のかかわりや、森林が地球環境に及ぼす影響、日本の林業の問題点などについても考察を行う。	
		農業知的財産	<p>(概要)</p> <p>農林水産業は、生活の根幹を支える重要な産業でありながら、これまで十分な知的財産に関する法的支援が図られていなかった。そこで、農林水産業における知的財産の重要性を認識し、知的財産制度を有効に活用するために、農林水産業と密接に関連する知的財産の基礎的知識や各種制度の在り方、農林水産業における知的財産制度の活用方法の修得を目的とする。具体的には、農林水産分野における知的財産法制の概観、種苗法に基づく品種登録制度の概要（海外での新品種の保護制度を含む）、農林水産品の「地域ブランド」保護制度である地域団体商標制度及び地理的表示制度の内容、農林水産業における品質誤認表示規制の概要、水際措置、食品の安全性確保のための各種手法（GAP、HACCP等）の概要等について修得する。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(71 犬飼 一博／7回)</p> <p>農林水産業における知的財産権の重要性、知的財産法制の概観、地域団体商標制度の概要、国内及び海外における品種保護制度の概要等について学修する。</p> <p>(75 中世古 裕之／8回)</p> <p>地理的表示制度の概要、農林水産分野における品質誤認表示規制の概要、水際措置、農林水産知財における今後の課題・展望等について学修する。</p>	オムニバス方式
専門コア群	基礎系	食農ビジネス学概論	<p>(概要)</p> <p>食農ビジネス学とは新しい学問領域であり、他の大学にはない本学に独自の領域である。また、食農ビジネス学には多様な専門分野が含まれる。したがって、これから食農ビジネス学科で学ぶべき課題を見だし、主体的に取り組むうえで、まず食農ビジネス学とはどのような専門分野から成り立っているのかを理解する必要がある。本講義では、食農ビジネス学科の主な専門分野からテーマを設定し、オムニバス方式の講義により食農ビジネス学とは何かを理解し、主体的に取り組む課題を見だせるようになることを目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(1 小野雅之／2回)</p> <p>「食農ビジネス学を学ぶために」をテーマに、科目全体のガイダンス、食農ビジネス学の目的と専門領域などについて概説する。また、「食と農の変遷と現在」をテーマに、食と農がどのように変遷してきたのかを概説したうえで、今日の食と農の姿について講義する。</p> <p>(7 吉井邦恒／1回)</p> <p>「わが国と世界の食料需給の農産物貿易」をテーマに、わが国と世界の食料需給と農産物貿易の現状と課題について講義する。</p>	オムニバス方式

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	基礎系	食農ビジネス学概論	<p>(6 柳村俊介／1回) 「農業経営の発展方向」をテーマに、わが国の農業と農業経営の動向を踏まえて、今後の農業経営の発展方向について講義する。</p> <p>(4 成耆政／1回) 「農の6次産業化」をテーマに、農業・農村の活性化の方向として期待されている6次産業化の意義と課題について講義する。</p> <p>(8 浦出俊和／1回) 「地域のマネジメント」をテーマに、農村地域が抱える諸問題と、その解決をめざす取り組みについて講義する。</p> <p>(5 濱田英嗣／1回) 「フードシステムと食品産業」をテーマに、フードシステムの全体像と、構成する産業の相互関係について講義する。</p> <p>(12 戴容秦思／1回) 「農畜産物の流通」をテーマに、農畜産物の流通のしくみと課題について講義する。</p> <p>(9 副島久実／2回) 「水産物の流通」をテーマに、水産物の流通のしくみと課題について講義する。また、「農水産物のマーケティング」をテーマに、マーケティングの理論と農水産物への応用について講義する。</p> <p>(11 中塚華奈／2回) 「食品の表示と認証」をテーマに、食品表示・認証のしくみと意義について講義する。また、「都市と農業」をテーマに、都市と農業の関係と、その今後のあり方について講義する。</p> <p>(3 田中樹／1回) 「農業と環境・生態系」をテーマに、農業と環境・生態系の関わりについて講義する。</p> <p>(10 谷口葉子／1回) 「循環型農業の理念と取り組み」をテーマに、持続可能な農業のための循環型農業の理念と取り組みについて講義する。</p> <p>(2 北川太一／1回) 「協同の理念と役割」をテーマに、食と農の共生のための協同の取り組みの理念と意義について講義する。</p>	オムニバス方式
			食と農の倫理	<p>(概要) 食と農をめぐる様々な問題が存在するなかで、その解決に向けた行動規範として、食と農の倫理がある。これは、食（消費者）と農（生産者・供給者）の双方の倫理的な行動によって、問題の解決につなげようとするものである。本講義では、食と農をめぐる諸問題の所在を理解したうえで、食と農の倫理の思想と理念への認識を深めるとともに、その視点から課題の解決・緩和のための取り組みや制度を知ることが目的とする。</p> <p>(オムニバス方式／全15回)</p> <p>(1 小野雅之・10 谷口葉子／1回) (共同) 食と農の倫理について、それぞれの領域において分担して概説する。</p>	オムニバス方式・共同（一部）

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	基礎系	食と農の倫理	<p>(1 小野雅之／7回) 食への権利と倫理的消費、食分配の不均衡、食品ロス、食料アクセス問題、企業の倫理とコンプライアンス、ソーシャルビジネスと CSV、農福連携と社会的包摂をテーマに学修する。</p> <p>(10 谷口葉子／7回) 寄付文化と応援消費、食のオルタナティブ運動、環境保全型農業、公正と社会正義、アニマルウェルフェア、海と森林の保全、スローフードをテーマに学修する。</p>	オムニバス方式・共同（一部）
			基礎経済学	「ミクロ経済学」と「マクロ経済学」の事前基礎科目として本講義では、まず経済と経済学の基礎理論(原理と手法など)について講義を行う。その上で、我々を取り巻く現実の複雑な経済現象とさまざまな経済問題などについての分析と応用の能力を農学の視点から養う。また、現代経済における経済主体、すなわち家計、企業、そして政府の意思決定(経済活動)と役割に関する理論と手法、および国際経済学の理論と実態についても講義する。	
			アグロ・エコロジー論	人びとの暮らしを支える農業(農耕、牧畜、狩猟採集、林業、漁労などを幅広く含む生業)は、それぞれの地域の気候や生態系および社会・経済・文化との密接な関わりの中で成立している。また、「風土」という言葉があるように、私たちが親近感(安らぎ、美しさなど)を感じる景観や生態系は、農業などの暮らしの営みのなかで形づくられてきた。本講義では、日本国内や海外の幾つかの地域の農業を参照して、それらと気候や資源・生態系(地形、植生、土壌など)および人びとによる働きかけとの関係を理解する。	
			基礎統計学	統計学は世の中で起きている事象を限られたデータから本質的に理解する上で役立つ重要なツールであり、社会で幅広く活用されている。本講義では、データのまとめ方(記述統計)や確率分布に関する理論的背景の学修を基礎として、標本データから母平均や母比率を推定する方法や、2つの標本の代表値の差を検定する方法について農学の視点から学ぶ。また、相関分析や回帰分析を用いて2つの標本の相関や因果関係を検定する方法を学ぶ。	
			食と農の近現代史	今日のわが国の農業・農村社会や食生活・食料消費は歴史的に形作られてきたものであり、その現状の特徴や課題を理解するためには、農業・農村社会や食生活・食料消費の歴史的な変遷について理解すること必要である。本講義では、近現代のわが国の農業・農村社会と食生活・食料消費の歴史的な変遷を画期区分し、それぞれの段階における経済・社会の状況、農業と食生活の状況と特徴、課題について、特に現代(第2次世界大戦後)を中心に講述する。そのことにより、今日の食料・農業の姿が形づくられてきた歴史的な経過に関する理解を深めることを目的とする。	
			ミクロ経済学	経済学とは、現実の経済(生きるために必要な財・サービスを生産し、分配し、消費すること)を説明する学問であり、特にミクロ経済学では、個々の企業や家計といった経済主体の行動の分析や、市場における需要と供給の分析を通じて、現実の経済を理解する。本講義では、需要および供給の特質、市場における需要と供給の調整のしくみ、経済主体である家計および企業の行動を学ぶとことを通じて、ミクロ経済学の基本的知識と考え方を農学の視点から理解することを目的とする。	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	基礎系	マクロ経済学	マクロ経済学は個別経済主体の相互作用の結果で発生する国民経済の総体的な現象を研究対象とする経済学の一分野で、分析対象は国民経済、または国家経済全体である。したがって、「基礎経済学」「ミクロ経済学」受講後となる本講義では、まずマクロ経済学的視点で、経済学の基礎理論(原理と手法など)について講義する。その上で、我々を取り巻く現実の複雑な経済現象とさまざまな経済問題などについての分析と応用の能力を農学の視点から養う。そして、現実経済において非常に重要なテーマである株式や投資信託などへの投資、公的年金、医療などの社会保障などについても講義と分析を行う。	
			農業簿記・会計学	農業経営を営む主体にとって、現在の経営の状態を正確に把握することは必須であり、それを計数で把握するためのツールが農業簿記であり、農業簿記・会計は、経営活動を取引として記録・分類・計算・整理に加えて、それらを評価して財務諸表を作成することを対象としている。本講義では、複式農業経営簿記を取り上げ、農業簿記会計に関する基礎的知識とその意義、農業特有の取扱いを踏まえた簿記記帳、決算時の会計処理、財務諸表の作成・分析について学ぶ。	
			社会調査論	社会調査の方法はさまざまである。本講義では調査目的にあわせて調査方法を決定し、調査を設計、実施し、分析しうる形にまで整理していく具体的な手法を学ぶ。調査対象者の選定、全数調査と標本調査、標本調査に際してのさまざまな手法、調査票の作り方、調査の配布回収方法、調査データの整理方法などについて、実践的な例をとりあげつつ解説していく。	
			食農ビジネス最前線	今日の食料や農業に関しては、農林水産物の生産や加工食品の製造と流通に関わる農林漁業者と食品産業(食品製造業、食品流通業、フードサービス業)に加えて、都道府県と市町村の行政、農林漁業者や消費者の協同組合など、さまざまな主体が関係している。そのため、食農ビジネスについて実践的に学ぶためには、これらの主体が現在どのような取り組みを行っているのかを知ることが重要である。また、就職先を考えるうえでも、食農ビジネスの最前線で活躍している人たちや行政、協同組合の職員の活動に触れることは有益である。本講義は、農林漁業者や食品産業の社員、都道府県や市町村の職員、協同組合の職員など、食農ビジネスの最前線で活躍している人たちをゲストスピーカーとして招き、その経験や現在の取り組みについて講義を行う。	
	農業経済・経営・政策系	農業経営学	農業経営のあり方は、商工業と異なる特徴をもつとともに、国や地域毎の個性も強く表れる。農業経営に関する多様な事象を認識するためには一般理論が欠かせない。本講義では、近代の農業経営の発展に関する理論を解説することを第一の目的とする。ただし、農業経営学の学ぶ目的は実際の農業経営活動やそこに潜む問題を認識することであり、理論はそのためのものである。また、実態認識に裏付けられてこそ理論に対する深い理解が可能になることから、我が国や諸外国を題材に農業経営に関わる様々な事象を取り上げ、実態と理論の関係を重視して講義を行う。		
		食料・農業経済学	食料は人間が生きていく上で必要不可欠であるが、個人の消費能力には限界がある。このような食料の必需性と飽和性、さらには自然条件に左右される農業生産の不安定性や乏しい貯蔵性等から、農業や食料関連産業は、一般の商工業とは異なる特徴を有している。本講義では、このような食料・農業の特殊性を踏まえながら、食料消費の動向、農業及び食料関連産業の現状と問題点・課題等について、経済学的な考え方に基づき、理解し考察する。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	農業経済・経営・政策系	食料・農業・農村政策論	日本をはじめ、アメリカやEU等の先進国では、国内総生産に占める農業の割合は低くなっているものの、農業・農村を守るため、多額の予算が投入されている。食料自給率が4割を下回り、農業従事者も減少・高齢化する等、日本の農業は様々な課題を抱えているが、一方で良質で安全安心な農産物の供給や地域社会の維持・活性化に寄与している。本講義では、わが国の食料・農業・農村の現状を把握した上で、諸問題に対応するために講じられている政策について、内容を整理し、経済的効果を考察する。	
			農業経営管理論	現代の農業経営は、家業の継続にとどまらず、周到かつ発展的な経営戦略を確立し、それを実行することが求められている。その基礎をなすのが経営管理である。本講義では、経営の基本となるモノ・ヒト・カネに関わる管理分野を取り上げ、経営管理問題が顕在化した背景と経営管理の課題・方法について解説する。農業経営管理は1990年代以降に論じられるようになった領域である。企業的農業経営が広がり、積極的な事業展開が見られるようになったことが、農業経営管理論の創成を促した。本講義では、1990年代以降の農業経営の動向に注意を払いながら、一般経営学における経営管理論と共通する領域と農業経営の特質を反映した独自の領域とを識別し、農業経営管理を体系的に論じる。	
			農村社会学	イエとムラを軸に形成された我が国の伝統的な農村社会は長期にわたる安定性を示し、日本社会の基層をなしてきた。このような我が国農村の特質を海外と比較しながら認識するとともに、急激な変化を示す農村の実態をとらえること、そして政府の政策を含め、新たな農村づくりに向けた諸々の取り組みについて理解を深めることが本講義の目的である。イエとムラをどのように理解するかは、長い歴史をもつ我が国農村社会学の最大のテーマであり、多くの研究蓄積がある。これら学説の要点を説明しながら、我が国の伝統的な農村社会を説明する。一方、このような伝統社会は安定的であったがゆえに、変化が始まるとその速度は急激である。その様相を説明しながら農村コミュニティの近未来像を描写する。農村の内外にわたる多様な主体が農業と農村社会に関わりながら、農業・農村の多面的機能を維持・発展させるためにつくられる仕組みを考察する。	
			6次産業経営論	本講義では、主に、日本農業における大きな可能性ともいえる6次産業（1次産業：生産物の生産×2次産業：農産加工・製造業など×3次産業：生産物や外注加工品の流通その他の利用など）を対象にさまざまな経営学的手法と理論からアプローチを行う。そして、6次産業の制度的仕組み、政策的支援、実態と課題、今後の可能性などについて講義を行う。	
			地域マネジメント論	社会経済構造の大きな変化により、地域における複雑かつ多様な諸問題に対して、地域の「自立」「活性化」の重要性が高まっている。そこでは、地域資源を見直し、その適正な利用・管理、すなわち、マネジメントが必要である。本講義では、地域マネジメントの考え方とその対象が有する特質を整理した上で、農村地域における活性化への具体的な取組み（グリーン・ツーリズム、地域ブランド化、バイオマスの利活用）について、地域マネジメントの視点から考察する。	
			食農ビジネス実践論	農業経済・経営・政策系で実践的に学修し、卒業研究を行うためには、食農ビジネスの実践事例から学ぶことが不可欠である。本講義では、食農ビジネスの経営に関する基本的な考え方に対する理解を深めるとともに、先進的な実践事例を取り上げ、その実践の背景、目的、取り組みの過程と内容を調べ、その成果と意義について考察を行う。	共同

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	食品産業・流通系	フードシステム論	農漁業生産からそれら生産物を取り扱う流通業を経由して、川下の食品小売業、外食産業さらに最終需要者である消費者に至る食料品全体の流れをフードシステムとして理解する。生産現場から食卓に至る過程を社会的分業という視点にたつて、フードシステムを構成している生産者、中間流通業者、小売業者それぞれがどのような役割(機能分担)を演じているのかを総合的に学ぶ。さらに、魚離れ問題に代表される日本人の食生活・食文化の崩壊・食品需要の縮減の中で、新たに取り組みされている農水産物の輸出や消費者に対する食育についても理解を深める。	
			食品産業論	農漁業、食品製造業、外食産業、食品流通業等で構成される食品産業の就業者数は我が国産業全体の約 20%を占め、重要な産業として位置している。本講義では食品産業の多様性や特徴について、個別業種の技術革新や競争構造さらに市場戦略などを含め総合的に学び、食品ビジネスに関する理解を深める。また、食生活に密着した食品産業の特色として、その盛衰が消費者ニーズの変化に大きく関係していることから、家庭・家族の変容(単身世帯・高齢化・女性の社会進出等)や食生活の変化に食品産業がどのように対応してきたかについても論じる。	
			食料・農業市場論	今日の市場経済のもとでは、農業経営や食品製造業、さらには消費者も、さまざまな側面で市場との関係を持っており、食農ビジネス学を学ぶうえで、食料・農業市場に関する知識を身につける必要がある。本講義は、食料・農業市場に関して、第一に、食料・農産物の市場と流通に関する基礎理論を踏まえて、その特徴と構造、現状について講義するとともに、第二に、農業経営に関連する諸市場の構造の特徴と、生産資材流通の現状について講義する。さらに、食料・農業市場の今後のあり方について講義する。	
			農畜産物流通論	TPP やメガ EPA など関税削減・撤廃の動きは、より多くの安価な海外産農畜産物が日本に輸入されることを意味する。消費者にとって安価かつ多様な食材が手に入るという安易な考え方もある。しかし中長期的にみれば、食料自給率のさらなる低下に拍車がかかり、日本農業がほぼ完全に国際競争にさらされ、国内の食料生産基盤が存続の危機に直面することが、次世代の食卓に関わってくる重大な問題である。特に関税収入などによる補助金支援の下で成り立っている畜産部門が大きな衝撃を受ける。畜産物のフードシステムは、採れた状態で流通できる青果物と異なり、繁殖や肥育、と畜、搾乳などの工程を必要のため、加工流通業者など非農業資本の企業的動きが大きな影響をもたらす。本講義では、こうした背景と特徴をもつ農畜産物とりわけ食肉や卵、牛乳・乳製品など馴染みのある品目の流通システムについて理解する。海外の畜産流通についてもふれる。	
			水産物流通論	水産業の現状と課題、水産物の商品特性、水産物流通の仕組みを学び、水産物流通の特徴(産地市場と消費地市場の制度や機能等)や現代的な特徴(市場外流通の拡大、産地販売力の強化、水産物ブランド化の取り組み、6次産業化、量販店における水産物販売の動向等)について理解する。また、現代的な水産物消費の動向とその背景や要因、水産物流通・消費の中の輸入水産物の浸透等についても学び、これからの日本の水産物流通や水産物消費のあり方について検討していく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	食品産業・流通系	農水産物マーケティング論	これまで構築されてきたマーケティング理論は「作った製品を売るのではなく、売れる製品を作る」という発想からなされてきた。そのため、農水産物にはなじまないという指摘もある。しかし、たとえ農水産物にはなじまない側面があるとしても、基本的なマーケティングの考え方と基本的な理論を理解していなければ、そうした側面に気づくことができない。そこで本講義ではマーケティングの考え方と基本的な理論を学ぶことを通じて、随時、農水産物マーケティングの事例を盛り込み、農水産物マーケティングのあり方について検討していく。	
			食品表示・認証論	食品表示とは、農林水産業で生産された一次産品およびそれらの加工品を消費者が購入する時に、品質や内容を見極める重要な情報源である。我が国の食品の表示は、平成 27 年に施行された食品表示法およびそれに関連する検査・認証システムによって、一定のルールに基づいて付されている。現在の食品表示法は、消費者が食品を摂取する際の安全性及び一般消費者の自主的かつ合理的な食品選択の機会を確保することを目的とし、食品衛生法、J A S 法、健康増進法の食品表示に関する規定を統合した一元的な制度となっている。本講義では、情報経済学の理論を用いた食品表示の意義とその内容や検査・認証システム、その他、食品にまつわるシグナリングおよび海外の制度との整合性等について、専門的な知識を修得する。	
			女性起業論	農山漁村地域では地域資源を活かした起業活動が活発に繰り広げられている。中でも農山漁村女性による起業活動は地域活性化にも大いに期待されているものである。また、起業活動の中には、農水産物加工や直売、レストラン、体験事業、民宿など様々なタイプがある。本講義では、農山漁村女性による起業に着目し、その成立と展開、実態、課題等について実態分析を通じて理論的に学ぶ。さらに、起業活動をはじめめるにあたって必要な事業計画、資金調達、経理、労務管理など起業や経営に必要なノウハウについても学ぶことで、農林水産物と地域をつなぐビジネスに必要な基礎知識を身につける。	
			食品産業経営戦略論	食品産業・流通系で実践的に学修し、卒業研究を行うためには、食品産業（食品製造業、食品卸売業、食品流通業、フードサービス産業）の経営戦略を学ぶことが不可欠である。本講義では、経営戦略の代表的な考え方に対する理解を深めるとともに、食品産業のなかから代表的な企業を取り上げ、その業界の構造と特徴を把握したうえで、企業の経営展開と経営戦略の具体的な内容と、どのような経営成果が得られたのかを調べ、食品産業の経営の分析と考察を行う。	共同

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	食農共生・循環型農業系	食農共生論	近年、さまざまな側面から「食と農の距離の拡大」（食と農の乖離）の問題が指摘されている。私たちが真に豊かな食を実現し、日本の農業を守り発展させていくためには、食と農の距離を少しでも短くすること、すなわち食と農を結び両者が「共生」していく道筋を考えていかなければならない。本講義は、食農共生・循環型農業論系の概論として「食と農の距離」の問題を考えながら、生産者と消費者、農村（むら）と都市（まち）、産地と食卓を結ぶ食農共生の課題や方向性について理解し、考えていく。	
			循環型農業論	農業やその川下のフードシステムにおける持続可能性の追究が国内外で重要性・緊急性を増してきている。本講義では、農業がもたらしてきた様々な環境問題を学ぶと共に、環境問題の解消や緩和のための循環型農業の取り組みについて、その効果、技術、関連政策の学修を通して深く理解することを目的とする。また、循環型農業に取り組む経営の学修を通して、環境に配慮した農業生産の技術の実際や施策の活用実態について理解を深める。	
			食農教育論	食農教育とは、「食」が有する多様な役割の大切さを伝える「食育」に、「食」を育む根本である農林水産業に関する知識や体験を含めた総合教育のことである。2005年に施行された食育基本法では、国民の「食」に関する考え方を育み、健全な食生活の実現を目標とし、都市と農山漁村の共生・対流をすすめ、「食」に関する消費者と生産者との信頼関係を構築して、地域社会の活性化、豊かな食文化の継承及び発展、環境と調和のとれた食料の生産及び消費の推進並びに食料自給率の向上に寄与することが期待されている。本講義では、食農教育とは何かを理解し、自らで食農教育プログラムを企画する知識を修得する。	
			協同組合論	最近「農協改革」という言葉をよく耳にする。農協は民間の企業（株式会社）とは異なる「協同組合」だが、ではいったい協同組合とはどういうものであるのか。本講義では、食料・農業・フードシステム等の問題と深いかかわりがある農協（農業協同組合：JA）を中心に、協同組合の存在・役割が、日本の農業・食料や農山村をはじめとする地域の経済・社会、さらには私たちのくらしの問題と密接に関わっていることを理解していく。	
			都市農業論	都市農業とは、市街化区域内農地とその周辺で営まれる農業のことである。市街化区域内農地は、国内の全農地の約2%しかないが、都市農家の戸数や販売金額は全国の約10%を占めており、食料生産をはじめ、環境保全、景観形成、文化の継承、食農教育、防災空間、福祉との連携などにおいて様々な機能を有している。都市政策における都市農地の位置づけや税制措置は、高度経済成長期の「宅地化すべきもの」から、都市農業振興基本法が施行された近年では「都市にあるべきもの」へと目まぐるしく変化してきた。本講義では、都市農業の成立経緯や都市農業が有する多面的機能、都市農業の実践事例について学ぶとともに、ディベートやワークショップを通して、都市農業に対する自らの知見を深める。	
			非営利協同論	近年、協同組合やNPOなど、非営利協同組織に対する関心が高まっており、実際に農村を中心とした地域づくり、農業や食の分野も含む地域経済に関わる事業を行う非営利協同組織や非営利協同組織どうしの連携（非営利協同組織間協同）の取り組みが各地で展開しつつある。本講義では、こうした非営利協同組織の問題を取り上げて、その活動が日本の農業・食料や農山村をはじめとする地域の経済・社会、さらには私たちのくらしの問題と密接に関わっていることを理解していく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門コア群	食農共生・循環型農業系	有機農業論	本講義は、国内外における有機農業の定義や思想の系譜および有機農産物の品質上の特性を学ぶとともに、有機農業に特徴的に見られる生産・流通・消費・政策上の特性を社会科学的な視点より理解することを目的とする。また、講義中のディスカッションを通して、残留農薬による健康危害のような科学的不確実性を伴う事象や、有機農業を推進するための方法論等、答えのない問いに対する自らの考え方を整理し、論理的に説明する力を養う。	
		農村コミュニティビジネス論	食農共生・循環型農業系で食と農の共生のあり方やしくみの構築について実践的に学修し、卒業研究を行うためには、農村コミュニティビジネスの実践事例から学ぶことが不可欠である。本講義では、農村コミュニティビジネスの基本的な考え方に対する理解を深めるとともに、代表的な実践事例を取り上げ、その実践の背景、目的、取り組みの過程と内容を調べ、その成果と意義について考察を行う。	共同	
	国際農業系	比較農業論	さまざまな気候・生態環境、文化・歴史、社会・経済状況を背景に、世界各地には多様な農業が見られる。本講義では、国内外の農耕文化の類型や特徴、系譜と変遷、気候や生態環境および社会・経済状況との関わりを知り、それらを比較し相対化することでそれぞれの農業の成り立ちおよび気候や地域性を越えた共通性について理解する。多角的・多層的・俯瞰的に捉えることを通じて、農業や環境についての知識や理解を豊かにする。		
		国際農業論	日本は世界有数の農産物輸入国であり、国民への食料供給を確保するためには、貿易交渉等を通じて、国内農業の生産力の維持と農産物輸入の安定化を図ることが重要である。また、世界の農産物貿易では、アメリカ、EU等の先進国が輸出・輸入ともに、主要なプレーヤーとなっており、先進国の農業事情や農業政策は世界の食料需給に大きな影響を与えている。本講義では、世界の食料需給、先進国の農業事情・農業政策、農産物に関する貿易交渉について、経済学的な考え方にに基づき、理解し考察する。		
		農業開発論	人口増加や偏在（都市集中や過疎化）や人間活動の拡大、気候変動などを背景に、アジアやアフリカあるいは日本国内の地域社会は、貧困、水質や大気汚染、生態系の劣化、自然災害、在来文化や相互扶助の仕組みの消失など数多くの問題に直面している。農業開発は、それらの諸問題の解決や未来社会の形成に関わる取り組みである。本講義では、農業開発の理論と系譜および世界各地の農業と生態環境との関わりを理解したうえで、農業開発をめぐる学術研究や社会実践の事例から問題解決や未来社会の形成に果たす農業の役割と可能性を考える。		
		現代韓国農業論	本講義では、韓国農業を対象に、幅広い、さまざまなテーマを取り上げ、講義を進める。まず、韓国農業の一般的な概況（農業従事者数と農家戸数の推移、農業生産額、食料需給など）について講義を行う。そして、韓国の主な農業政策を農業構造政策、食料需給政策、農村振興政策に大きく分けて解説・評価を行う。韓国人と日本人は外見としては似ているものの、内面は相当違うように、韓国農業と日本農業はその中身をみると相当異なる。隣国である韓国農業を知ること、日本農業について見つけ直し、一層理解を深めるきっかけとなることを主な目的とする。		

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門コア群	国際農業系	現代中国農業論	国土も人口も大きく、近隣諸国のなかでも多大な影響力を持つ中国では、急速な経済発展によって、食料需給や農村の社会構造が大きく変化し、集約的で多様な農業形態への移行が進行している。本講義では、日本のフードシステムに密接に関わってきた中国の農業の発展動向について学ぶ。食料・農産物の多くを中国に依存している日本の現状を省みると、中国の農業・農村の動向を正確に理解することが大きな意味を持つ。日本と中国は、地理的条件をはじめ、経済発展パターンや経済構造において共通性が強く、農業も家族経営が主で、経営規模は零細という点でよく似通っており、経済発展にともなう農業の比較優位の低下、農業人口の高齢化、食料自給率の低下など、中国農業が直面する問題も日本と相通ずるものになっている。中国の経済政策体制の基礎知識にふれながら、現代中国の農業・農村における特徴的な変化について解説する。	
	専門総合群	農業生産系	園芸の技術	我が国の果樹、野菜、花卉などの園芸作物生産は、限られた土地を有効活用し、なおかつ消費者のニーズに合った高品質な商品を生産するため、種々の特殊な技術を用いて行われている。「園芸の技術」では、実際の園芸作物における生産流通現場で応用されている興味深い「技」に焦点を当てて紹介する。植物生理学的な背景に基づく各技術の概要と、それらの技術を用いることで得られる生産性の向上や市場における付加価値および経済効果について論じる。	
			植物の病気	ヒトや動物と同様に植物も病原菌に感染し、病気にかかる。しかしながら、病原菌だけが原因ではなく、植物の健康状態や品種の違い、周辺の環境などの要因によって発病するかどうかが決まる。本講義では実例を紹介しながら、なぜ植物は病気になるのか、どのようにして植物を病気から守るのか、などの植物病理学の基本事項を修得する。また植物病に関わる微生物、植物、環境等に関する基礎知識の修得を通じて、農作物の持続的・安定的な供給、食品の安全・安心、国際的な食料の流通や消費など学科で学修した諸問題について幅広い視点で議論する。	
			植物の改良	人は植物を食料として利用するだけでなく、家畜の飼料や観賞用、工業用原料、医薬品用原料などさまざまに利用している。そして、人は品種を作るという概念を持つ前から収穫量が多いものや病気に強いものなど、自然に存在する有用な形質を示す植物を選んできた。しかし、メンデルが遺伝の法則を発見したことにより、体系的に植物を改良することが可能となった。本講義では、改良の対象となる植物の形質について概説するとともに、従来おこなわれている植物改良の手法から、今日、注目を集めている遺伝子工学の技術を利用したゲノム編集までを解説し、植物の改良に必要な基礎的な知識を身につける。	
昆虫とくらし	昆虫の祖先は約4億年前に地球上に現れ、今や地球上の全生物種の70%を超える種数を占めると言われている。この繁栄に成功した理由として、脊椎動物にはないムシが持つ昆虫独特の環境への適応能力が指摘されており、我々ヒトは、ある時はムシと作物を争い、ある時はムシの特性を学び応用することで生活をより豊かなものへと変えていくことに成功した。「昆虫とくらし」では、害虫と益虫というヒトの視点を通じたムシの二面性について紹介し、ムシを通じて生態を中立的に見る目を身につける。				

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門総合群	農業生産系	作物とエネルギー生産 作物は、人類が利用するエネルギーの重要な供給源の一つとなっている。「作物とエネルギー生産」では、(1)バイオマスエネルギーにおける生産と利用の現状および課題、(2)エネルギー作物における種類、生態・形態・生理的形質、栽培および利用、(3)バイオ燃料の種類、製造法および利用などについて概説する。作物とエネルギー生産との係わり合いやエネルギー作物に関する現状、重要性と課題を理解し、それらを説明する上で必要な基礎知識を身につける。	
			生きている土壌 作物の生産基盤として、土壌の役割は重要である。土壌中には微生物を含めて多くの生物が生息しており、物質循環をはじめとした機能面で役割を担っているほか、土壌自身も外部からの影響により変化しており、まさに土壌は生きているといえる。また、作物などの植物生育と関連していることから、他の生物の生命活動にも影響をおよぼしているほか、周辺環境のかかわりも深い。本講義では、上記の観点から、土壌自身の生物性、特性の変化、作物生育や周辺環境とのかかわりなど、幅広い観点から土壌の役割について講義する。	
	応用生物系	分子からみた植物の働き 人類は、野生植物の役立つ性質を伸ばし、不要な性質を失わせたり変化させることで、野菜や作物を作り出してきた。これを野生植物の栽培化とよぶ。古代の人類はこれを経験的に行ったが、植物分子の知識が蓄積した現代は、望みの性質をもつ植物をデザインすることも可能になりつつある。本講義では、食糧生産の基盤となる植物の働きに関して分子レベルの知識を得ることを目標として、植物の様々な形質や機能に関する分子を紹介し、その働きを解説する。また、植物の最も基本的な機能「光合成」の分子基盤も説明する。		
		ゲノムと生命 ゲノムとは何か？この問いに対する答えは一つではない。ゲノムの定義は時代とともに何度も変わってきた。一口にゲノムと言っても、生物種、調べる現象、解析の技術や手法などによって、ゲノムのもつ様々な側面や性質が見えてくる。本講義では、ゲノムの一般的な性質や機能と、生命を操作する「ゲノム科学」の先端技術などを紹介するだけでなく、ゲノムの科学史、風変わりなゲノムを持つ生物、ゲノムに関わるユニークな現象などを紹介しながら、ゲノムとは何かを考え、ゲノム研究がこれからの人々や社会にどのような影響を与えていくのかを、自然観や生命観に対する影響も含めて、考察する。		
		生物の多様性と進化 (概要) 約 40 億年前に地球上に生命が誕生し、その後、地球環境の変化に伴い生命は進化して、現在、地球上にみられる多様な生物が生まれた。この間に多くの生物が絶滅していったことが化石研究から知られており、現存する生物は、私たちも含めて過酷な自然淘汰を生き残った一部の生物群である。また、人類は植物や動物を食糧として利用するために育種交配、また最近では遺伝子組換え技術を利用して人為淘汰し、生物の形質を変換させてきた。「生物多様性と進化」においては、植物、動物、微生物、海洋生物、及び昆虫について、これらの生物の多様性と進化について、自然淘汰と人為淘汰の観点から解説する。 (オムニバス方式／全 15 回) (20 小保方潤一／4 回) 植物に関して、地球の歴史と生命の誕生、藻類の多様性、陸上植物の進化、進化のメカニズムについて学修する。	オムニバス方式	

科目区分			授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	専門総合群	応用生物系	生物の多様性と進化	(17 井上亮 / 4回) 動物に関して、脊椎動物の起源、脊椎動物の進化、動物の多様性、産業動物の品種改良について学修する。 (30 豊原治彦 / 4回) 海洋生物に関して、海洋環境の多様性、海洋無脊椎動物の進化と多様性、魚類の進化と多様性、海洋生物の品種改良について学修する。	オムニバス方式
			動物とくらし	我々のくらしは様々な動物と関係して成り立っている。例えば、日々の食事は家畜や家禽などの産業動物によって支えられており、犬や猫などのペット（コンパニオン・アニマル）は日々の安寧な暮らしの重要なサポート役となっている。「動物とくらし」では、我々のくらしに、産業動物やコンパニオン・アニマルがどのように関わっているのかを学ぶとともに、それぞれの動物の生態や生理について説明し、くらしで関わる動物に関する基本的な知識を身につける。	
			微生物とくらし	有用微生物およびその利用に関して講義を行う。微生物には「バイ菌」という言葉に代表されるように、ネガティブなイメージがあるが、本講義では人類に役立つ微生物バイオテクノロジーについて広く述べる。具体的には、1)各種発酵食品製造における微生物の役割、2)有用物質生産の実例として微生物を用いたアミノ酸、核酸等の発酵生産および、抗生物質の発酵生産について、3)ニューバイオテクノロジーによる微生物機能の有効利用の事例として、遺伝子工学の利用によるタンパク質の生産、代謝工学等について、4)環境修復のためのバイオテクノロジーについて、などである。また、それらを自らが展開していくために必要な考え方、今後の発展の方向などについて講義する。	
			海洋生物とくらし	海洋は地球の表面積の約7割を占め、更に深海など人類にとって未踏の領域も含むフロンティアである。このように広大かつ深遠な領域に住む海洋生物は独自の世界を形成し、直接的或いは間接的に我々の暮らしと関わっている。「海洋生物とくらし」では、水圏の成り立ちから海洋生物の分類、生理、生態について概説し、特に我々の暮らしとの関わりが深い「魚介類」に対する理解を深めることを目的とする。我々にとって身近な魚介類について、その旬、味、などの背景について、化学的な視点から考察する。	
	食品栄養系	食品学入門	食品学入門は、食品の一般的特質、その食品の栄養的価値並びに保存性を高めるためにどのような加工がなされているか、食品の栄養成分の構造、性質を学ぶものである。本講義では、食品の1次機能(食品成分の化学)、2次機能(嗜好成分の化学)、および3次機能(食品の生理機能性)について学ぶとともに、食品の加工法、貯蔵法を学修する。本講義と一般的な化学や生化学を並行して学ぶことにより、食品加工手法と食品の一般的知識を身につけることを目的とする。		
		食品の安全性	食品は、貴重な栄養源であり生きていく上で欠かせないものである。この食品の安全性を守ることは健康を維持する上で重要である。本講義では、リスク分析の考えに基づき、食品の安全性がどのような制度、規制によって守られているのかについて学修するとともに、食品の安全性を脅かす有害要因およびそのリスクの評価方法について学ぶ。また、輸入食品の安全管理体制や食品の製造から食卓に至る各過程における安全管理体制について学び、リスク管理の理解を深める。さらに、食品の安全から安心を得るために大切なリスクコミュニケーションを模擬体験し、リスクバランスについて考える。近年、海外からインターネット販売による輸入が増加している健康食品の安全性についても学ぶ。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考	
専門科目	専門総合群	食品栄養系	旬の食材と薬膳	近年、少子高齢化や医療の高度化による医療費の増加は、国民健康保険制度などの医療保険体制の見直しや、国民一人ひとりが健康増進を図り、国民保健の向上すること目的とした健康増進法の施行にまで至っている。近年、薬膳や漢方などの基礎にある中医学的捉え方について、ヒトの体質、季節などに対応した健康を維持する食生活として注目されている。本講義では、身近な薬草および食薬の種類、効果、効能について中医学的捉え方を学修したうえで、薬膳や漢方方剤の知識を学修する。	
			栄養とスポーツ	専門分野で学修した知識・技能を、人々の生活の質向上や健康社会の実現へと展開するために、栄養・スポーツ分野におけるエビデンスに基づいた情報を理解する、具体的には、健康の維持・増進のための栄養・スポーツの基礎知識、運動不足や栄養の過多・不足がもたらす身体への影響、栄養摂取や運動トレーニングによる生体の適応およびそのメカニズムを理解する。さらに身体のみならずこころの健康のために望ましい運動や栄養、運動トレーニング法について理解し、さまざまなライフステージにおける心身の健康を維持・増進するための総合的学修を行う。	
			栄養と健康	巷には食と健康に関する情報があふれているが、その情報が正しかどうかを判断する事は難しい。栄養とは何か、カロリーとは何かに始まり、食生活に影響する諸因子、食生活と病気との関係、各栄養素の特徴と過不足の害、各食品群の栄養、食物アレルギーへと講義を展開して行く。後半は健康になるためには栄養と運動と休養（ストレス発散）が三本柱であることを学ぶとともに、栄養と健康に関する質問に答える。	
			病気の予防と食生活	日本人の死亡原因は、脳卒中や虚血性心疾患（心筋梗塞など）の循環器病とがんの割合が多くなっている。それらの多くの病気に関わっているのが生活習慣病である。生活習慣病とは、食事や運動、ストレス、喫煙、飲酒などの生活習慣がその発症・進行に深く関与する病気の総称をいう。その病因として、日々の食事や運動の生活習慣の乱れなどが考えられている。本講義では病気の予防と食生活、特に生活習慣病について学修する。	
	ゼミ・卒業研究		基礎ゼミナール	本ゼミナールは、新入生が学部・学科での学修を不安なくスタートし、目標を持って大学での勉学に励むために必要な基礎的知識・技能・態度を修得する教育プログラムである。すなわち、学生が大学での学修に必要な基本的知識や主体的で深い学びの方法を修得し、自ら大学での学びをデザインするとともに、将来の目標について考えることを目的とする。各専任教員による少人数ゼミナールを基本とし、教員と学生が密接にかつ自由に、相談・議論しながら進める。教材として全学共通教材である「First Year Study Guide」を活用し、大学として共通する項目を学修するとともに、教員独自の教材を用いて学修を深める。	
		食農ビジネス学基礎演習 I	大学における学修・研究活動や社会におけるビジネス活動において、PC の利用は一般的であり、また、様々な情報がインターネットを通じて簡単に取得できるようになっている。本演習では、情報を正しく利用するための情報リテラシー、情報倫理を学修し、PC を使用するための基本的な知識と技能（特に、Word、Excel、PowerPoint の基本的操作方法）を修得するとともに、Excel による経済データの基礎的な加工方法について学修する。各演習では、学修内容を補完するための課題を出し、知識・技能の定着を目指す。	共同	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門科目	ゼミ・卒業研究	食農ビジネス学基礎演習Ⅱ	本演習は、食農ビジネス学科での専門的な学修を本格的に始めるにあたって、わが国や世界の食料・農業・農村の動向と現状、解決すべき課題の所在について認識を深めるとともに、基礎的な知識を修得することを目的とする。具体的には、「食料・農業・農村白書」をはじめとする基礎的な文献をテキストにして、輪読、発表、ディスカッションを行うことによって、理解をより深めるとともに、主体的な学修の姿勢を身につけることを目的とする。	共同
		食農ビジネス学基礎演習Ⅲ	本演習は、食農ビジネス学科での専門的な学修をより深めるために、わが国や世界の食料・農業・農村の動向と現状、解決すべき課題の所在と解決の方向について認識をさらに深めるとともに、専門的な知識と考え方を修得することを目的とする。具体的には、より専門的な文献をテキストにして、輪読、発表し、ディスカッションを行うことによって、テキストの内容に関する理解をより深めるとともに、主体的な学修の姿勢を身につけることを目的とする。	共同
		食農ビジネス学研究Ⅰ	本科目は、食農ビジネス学科の各分野での専門的な学修を進めるために、それぞれの指導教員のもとで、学生の具体的な研究課題の設定につながるように、各指導教員の指導のもとで学生がテーマを設定し、それに関連する文献の読解を通して専門的な知識や考え方を修得するとともに、文献の内容をまとめ、論理的に考察し、発表できる能力を身につけることを目的とする。また、データの検索方法と集計・分析方法、フィールドワークの方法などを身につけることを目的とする。	
		食農ビジネス学研究Ⅱ	本科目は、食農ビジネス学科の各分野での専門的な学修を深めるとともに、それを応用して調査・分析できるようにするために、それぞれの指導教員のもとで、学生が具体的な調査・分析課題を設定し、その課題に関連する文献の読解を通してより専門的な知識や考え方を修得するとともに、データの検索方法と集計・分析方法、フィールドワークの実施方法などを身につけ、調査・分析に取り組む。これらを通して、卒業研究で取り組む課題を設定する。	
		卒業研究	これまでに学修した専門的知識・技能および汎用的能力をさらに深めて大学4年間の学修の集大成としての卒業研究を行う。卒業研究では、学生が研究テーマの設定、研究方法の策定、研究調査の実施、研究成果の解析・まとめを行い、卒業論文を作成するとともに、発表会において発表・ディスカッションを行う。これらを通して、学術研究における倫理的規範、課題の発見（研究テーマの設定）と解決（研究の進め方）、思考力・判断力（研究結果のまとめ）、表現力（論文作成およびプレゼンテーション）を身につける。さらに、教員とのディスカッションや共同研究などを通して多様な人々の協働する力を養う。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	共通系	大学教養入門	本科目の内容は、大学生としての教養を身につけるスタートラインに立つことにあり、自らが主体的に知識を獲得し、対話を通して理解を深め、表現するための技術等を修得することである。本講義では教養入門書を用いて ABD（アクティブ・ブック・ダイアログ）読書法や協働学習の習慣を身につけるとともに、チームワーク能力、コミュニケーション能力を身につけることを目標とする。	集中・共同
	語学系	日本語表現法	我々は日本語を用いて、何をどのように表現しているのだろうか、そして表現できるのだろうか。本科目では、日本人が日本語を用いて、どのように表現してきたのか、そしてどのような表現が可能なのかを、様々な事例を通して考える。それによって、言語に対する感覚を研ぎ澄まし、言葉にこだわる人間になることを目指す。日本語表現の特徴について、具体的に説明できること、日本語表現を客観的にとらえ、他の言語とも比較しつつ、多様な視点から考えることができるようになることを目標とする。	
		基礎英語 I a	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題についての平易なパッセージを読んで理解できるようになる。また、ゆっくり、はっきりと発声（再生）されれば音声だけでも理解できるようになる。読む・聞くことについては、CEFR-J[A2-1]を目標とする。	
		基礎英語 I b	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題についての平易なパッセージを読んで理解できるようになる。また、ゆっくり、はっきりと発声（再生）されれば音声だけでも理解できるようになる。読む・聞くことについては、CEFR-J[A2-2]を目標とする。	
		基礎英語 II a	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題について、基本的な語彙や表現を用いた英文を書けるようになる。また、前もって用意すれば同じ内容を口頭で発話できるようになる。書く・話すことについては、CEFR-J[A1.1-A1.2]を目標とする。	
		基礎英語 II b	比較的平易な英文を用い、「読む」「聴く」だけでなく「書く」「話す」活動を取り入れた 4 技能統合型の演習を行う。4 技能の基礎力を固めること、ICT を駆使した自律的英語学習の技能と習慣を身につけることを目的とする。大学生にとって身近な話題について、基本的な語彙や表現を用いた英文を書けるようになる。また、前もって用意すれば同じ内容を口頭で発話できるようになる。書く・話すことについては、CEFR-J[A1.3]を目標とする。	
		実践英語 I	これまでに学修した英語のスタディスキルをさらに向上させる。ICT 等を用いて、より高度な 4 技能統合型の演習を行う。インプット活動のみならず、アウトプット活動を取り入れ、各技能の基礎力および応用力を養う。読む・聞くことについては、CEFR-J[B1.1]を目標とし、自分に関連する内容（日常生活、学校生活など）の英文に関する基本的な情報を理解できるようになる。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	語学系	実践英語Ⅱ	これまでに学修した英語のスタディスキルをさらに向上させる。ICT等を用いて、より高度な4技能統合型の演習を行う。インプット活動のみならず、アウトプット活動を取り入れ、各技能の基礎力および応用力を養う。書く・話すことについては、CEFR-J[A2.1]を目標とし、海外研修、留学、ホームステイ、観光、あるいは海外からの訪問客への対応など、日本の大学生が英語を使用する現実的かつ具体的な場面と相手を想定しながら、複数の英文を連続して発話できるスピーキング力、複数の英文を組み合わせてパラグラフを構成できるライティング力を身につけるためのトレーニングを行う。	
		英語基礎会話 a	本科目では、基本的な英会話力の向上を目指す。日常における様々なシーンを想定し、会話がスムーズにできるように練習する。ペアワークやグループワークなどを通じて、自分のことを一方的に話すだけでなく、相手の話を聞いてそれに受け答えできるように訓練をする。また様々な英語表現に触れ、会話の幅を広げることも目的の一つとしている。	
		英語基礎会話 b	本科目では、英語基礎会話 a に引き続き、基本的な英会話力の向上を目指す。様々なシチュエーションを想定し、より深い内容の会話ができるように練習をする。ペアワークやグループワークなどを通じて、会話のキャッチボールがスムーズにできるように訓練を行う。文法の再確認も目的の一つとしている。	
		中国語Ⅰ	中国語を初めて学ぶ者にとって、中国語の基本的な発音や文法を理解し、一定の語彙数を早期に修得することが重要である。本科目では、中国語の発音や文法について学習するとともに、日常における中国語の表現方法の学習を通して、読む・書く・聴く・話すための基礎的な能力を修得する。	
		中国語Ⅱ	正確な発音と中国語文法の基礎を学習し、読む・聴く・話す・書くの四つの力を総合的にバランスよく修得する。1年間の学習を通じて初級中国語がマスターできる。単語を覚え、基礎文法を学び、簡単な文型を運用して、会話や作文ができるなど、基礎的な中国語能力の修得を目指す。	
		海外語学研修	本研修は、語学力（英語力）の向上と研修地の歴史・文化およびそこで生活する人々に触れ、国際的な知識と理解を深め、広範囲な国の人々と協力し合える国際感覚を身につけることを目的とする。事前に研修先の歴史や文化を調査することで、現地での研修を深められるようにする。研修先では、月曜日から金曜日に講義・演習を実施し、語学力別に分けたクラスで行う。研修に参加する学生同士で協力し合い、研修の目標達成を目指す。	集中
	情報系	情報リテラシーⅠ	近年、高等教育機関での勉学や社会人としての仕事において、パソコンを使えるスキルは必要不可欠である。本科目では、パソコン初心者进行を想定し、パソコンでの文書作成ソフトや表計算ソフトの基本的な使い方、また発表の場で広く使用されるようになったプレゼンテーション資料作成ソフトの使い方を中心に学ぶ。実践力をつけるため課題を中心に演習を進め、レポートや発表資料の作成が適切に行えるようにする。さらに情報セキュリティやモラルについても事例を通して学ぶ。	
情報リテラシーⅡ		卒業研究で数値データを扱う場合、その統計処理に関する知識は必要不可欠である。情報技術の有効利用の中でも、科学技術分野においてとりわけ重要であるデータの処理と分析のための種々の数学的処理技法を理解する。本科目では、情報リテラシーⅠで用いた代表的かつ標準的な表計算ソフトを用い、基本的な統計処理の方法を学ぶとともに、統計の基本を理解し、正しい統計処理方法の選択や結果の解釈を行うための基礎力を身につける。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	体育系	スポーツ科学Ⅰ	生涯を通じて明るく活気のある生活を営むために、スポーツ・身体運動は極めて重要な役割を果たす。運動技術の修得およびスポーツの楽しさを理解するとともに、自らの生活行動の中にスポーツ・身体運動を実践する能力を育成することを目的とする。本科目では、スポーツ・身体運動を通して①健康の維持・増進をはかる②運動技能を向上させることができる③マナーやルールを理解することができる④コミュニケーション能力やリーダーシップを培うことを目指す。	
		スポーツ科学Ⅱ	「スポーツ科学Ⅰ」で培った学修内容を応用し、心技体のさらなる向上を目標とする。①<心>スポーツ活動を通じた成功体験や規範遵守、主体性、自己統制、表現力、協調性、他者受容意識の向上など人間力の醸成を目指す。②<技>スポーツ科学Ⅰよりも高度なスポーツ技術の獲得を目指す。③<体>運動やスポーツが身体へ及ぼす影響やそのメカニズムについて理解し、自らの生活行動の中にスポーツを実践できる能力の育成を目指す。	
	人文系	心理学	心理学はその行動法則を明らかにする行動の科学として、広い領域に関係している。実際に見ることができる、観察可能な行動から、人間の“こころ”の動きを検討したり、目で見て確認できないものについても、観察・実験・調査といった様々な方法を用いて客観的なデータを集め、心の働きを研究している。本講義では、これまでに行われてきた多くの実証研究を学修することによって、心理学の基礎知識を身につけることを目的とする。	
		倫理学	現代の社会システムに関する理解を通じて、倫理的規範/価値観の変容について学修する。日本の高度成長期には「消費は美德」という言葉が流行し「大量生産/大量消費社会」を賛美したものであった。一方で、現代社会で時代をリードしているのは「Mottainai (もったいない)」というエコロジーを主軸としたものであるが、本当にこのような価値観の転換に成功しているだろうか。本講義では、20世紀の半ば以降、今日に至るまで社会を動かしている経済のシステムを理解した上で、それを変革するための道を探る。	
		哲学から学ぶ	哲学的な知の営みは、他の学問と比較してどのような独自性、特徴を持つであろうか。本講義では哲学的に問うことの本質を明らかにしながら、いくつかの哲学的・倫理学的問題を取り上げ、共に考えていく。「人間の心と動物の心」「悪」「人生と時間」といったテーマを中心に論じる。哲学的に考えるとどのようなことであるかを理解し、講義で取り上げる個々の哲学・倫理学のテーマに関して、自分なりによく考え、それを論理的に文章にまとめる力を身につける。	
		地誌学	本講義の目的は、地誌学の学修を通して、地理学的(空間的)な視点を用いて、世界各地の諸問題や地理的現象を把握する能力を身につけ、地域的な特徴や地域が抱える問題点を的確に理解することである。本講義では、世界各地の地誌について学修しながら、上記の能力の修得を目指していく。	
		人文地理学	窓の外にひろがる風景、大学が立地する町並み、人びとが抱くイメージなど。これらをどのように捉えることができるのか、また、どのように捉えてきたのか。それが本講義のテーマである。言い換えると、本講義は地理学史の流れに沿いながら、<地理学的なものの方・考え方>について幅広く解説するものである。この見方・考え方は、意識されていない場合も多いが、実はわたしたちの生活のさまざまなところに活用されている。本講義を通して、身近な問題を新たな視点から捉え直すきっかけを提供していく。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	人文系	文学から学ぶ	日本の近代文学の短編を読む。なお、明治から敗戦までの作品を近代文学と位置づける。文学作品を読むことは、それだけで我々の心を豊かにしてくれる。作品を読むことで、近代の日本人が何を考え、発見し、何に悩んでいたのか、共に考えていく。文学作品への抵抗をなくし、作品を読んで考える習慣を身につけることを目的とする。毎回、1編の短編作品を取り上げて講義し、作品を鑑賞する中で、その文学的特徴を説明できるようになることを目指す。	
		文化人類学	人類学はこれまで、世界中のさまざまな人々の多様な生の理解を通して、私たち人類が地球上に生き、存在するということがどのような事態なのかを探求してきた。本講義では、人類学の基礎的な概念や方法を概説し、人類学がどのような学問なのかを示した上で、そのような人類学的な見方の成立と歴史的展開をあとづける。そのうえで、人類学的思考がどのようなものであるか、人類学誕生以来の学説史的な展開、流れについて理解することを目指す。	
		女性学	女性学とは、男女ともが、社会のしくみについて考える場である。社会の「主人公」が男性であることが自明であった時代、「見えない存在」とされていた女性のあり方に目を向けることが女性学のきっかけとなった。しかし、それは、性別によって個人が生き方を決められてしまう社会のしくみそのものを問う学問および活動を意味する。現在では、性をめぐる社会のしくみは、男女それぞれの個人としての「生きにくさ」と何かしら関係があるのかもしれないと捉えられる一方、「もはや性別による不都合など存在しない」という意見も多く見られる。本講義では、1970年代以降、今日に至るまで、女性学において語られてきた様々なトピックをヒントに、性をめぐっての、今日的な社会のしくみについて、家族、恋愛、仕事、セクシュアリティなど様々な角度から理解を深める。	
	社会系	ボランティア活動論	本講義は、「ボランティアとは何か」をさまざまな角度から考察することを通じて、自己と社会の関係の理解を深めることを目指す。とりわけ、ボランティア活動の意義に関する複数の理解の各々を批判的に考察しながら、根本的な意味で〈互いに支え合う存在〉であるところの人間存在のあり方をつかむことを目標とする。本講義を通じて、現在行なわれているさまざまなボランティア活動の具体的な内容を知るだけでなく、ボランティアの意義の理解を深めることによって人間理解（すなわち私たちの自己理解）も深めることができる。	
		経済学入門	経済現象を理解するために必要な基本的知識や経済学的な考え方、現実の経済現象を事例として参照しながら、解説することを目的とする。戦後日本経済の歴史の大まかな流れや、雇用、企業組織、財政、社会保障といった日本経済の動きに関わる基本的な事項について説明でき、日々の経済ニュースを理解できるようになることを目指す。そのうえで、日本経済が抱える諸問題について、その重要性を理解し、異なる立場の議論を比較することができる力を身につける。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	社会系	日本の政治	人間が集団で生活している限り、法や条例、公共事業の影響を避けて生きることはできない。それらを決定するのが政治であり、皆政治に参加することによって自分自身の生活をより善いものに作りかえることができる。しかし逆に、政治に参加しないことによってより悪いものになってしまう可能性も否定できない。本講義では、有権者である学生に日本の政治についての基本的な知識を与えることを目的とする。政治学の区分で言うところの政治体制論、政治過程論、日本政治史、国際政治、地方自治の内容について、日本の政治を概観していく。また、最近のニュースが理解できるように、政治的な時事問題についても紹介し、解説する。	
		法学入門	法は私たちの日常生活と密接な関係にあり、私たちが普段あまり意識しないで行動をしても、その行為の裏には法律関係若しくは法律問題のあるものが沢山ある。法を学ぶことは世の中を知ることもつながる。本講義では、法学の基礎から始め、身近な具体的事例をとりあげ、民法、商法、刑事法、民事訴訟法などの基礎を解説する。日常生活において必要、有益な法律の知識を得て、身近な法律問題を法的な立場から考えるようになることを目指す。	
		経営学入門	基本的な企業経営の仕組みについて講義する。資本主義社会における企業の役割を踏まえて、現代企業の経営活動を理解することを目標とする。本講義では、組織論・管理論・戦略論の基本的な用語と概念を学び、それらを用いて具体的な経営現象を説明していく。経営学の基本的な理論と概念を理解することで、国家公務員一般職試験および地方上級職試験における専門試験で出題される「経営学」を理解できる程度の知識を修得することを目指す。	
		観光学	近年、日本への外国人観光客が急速に増加しているが、これは日本だけの現象ではなく、世界的に国際観光が盛んになっている。少子高齢化の時代を迎え、交流人口の増加を期待される観光は日本の重要政策に位置づけられ、今後ますますその必要性が高まってくると考えられる。本講義では、観光経済を学ぶうえでの観光の基礎知識を修得することを目的とする。観光振興の意義を理解し、観光現象について書かれた記事や文献を理解できるようになることを目標とする。	
		日本国憲法	本講義では、日本国憲法の意義、および基礎的知識を修得することを目的とし、講義テーマに関連する憲法上の問題を取りあげ、これと関わりのある基本事項、判例、学説を解説・検討する。さらにその知識を活用して、社会における多様な問題について、憲法の視点を踏まえて自分の言葉で発言できるようになることを目標とする。できるだけ身近な素材を利用し講義を進めることで、「憲法」と日常生活との関わりについて考えてもらえる機会とする。また、憲法をめぐるさまざまな考え方にふれ、物事を多角的にみる能力を養う。	
	自然系	教養数学	本講義では、農学部専門的知識を学ぶ上で必要となる、統計学などの応用数学と言われる知識を修得するための基礎的・基本的な数学の知識や考え方を扱う。それらを学び、理解することを通じて、論理的思考能力・判断力・表現力といった素養を身につける。さらにそのような数学的素養を活かし、農学領域やそれを取り巻く様々な分野に対しても応用できるような基本的技能を習得することを本講義の目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	自然系	生命倫理	農学の学びにおいて「総合科学」の基礎となる幅広い知識の修得に加え、倫理観をもった豊かな人間性を涵養する教育が必要であり、農学分野における生命科学の倫理的配慮が社会的、科学的、技術的側面などから求められている。なかでも、農学分野において、ゲノム解析、各種細胞の研究利用、遺伝子組み換えによる品種改良など生命に係る技術利用が行われ、人類に有益な結果をもたらす一方で、予期せぬ有害な影響なども予測される。本授業では、生命科学分野で配慮されるべき生命倫理観及びその行動を学ぶ。「ヒトの生死や生命とは何か」、「人間とは何か」など根源的な問いに向き合いながら、農学における生命科学の最新技術をヒトや地球環境に及ぼす影響を考察しながら、倫理的行動について学修することを目的としている。	
		生物と環境	環境をめぐる諸問題は、ニュースでみない日はないほど私達にとって身近な話題となっている。環境を理解するためには、さまざまな知識や考え方が必要である。本講義では、生物（ヒトも含む）と環境の関わりを学ぶことを通して、私達の身の回りにある環境・環境問題を正しく理解できるようになることを目指す。そして、これからの時代を生きる人類にとって避けて通れない環境問題の解決を模索していく上で必要になる考え方を身につけ、自身で情報を見わけることができるようになることを目標とする。	
		地学	地学の大きな柱である固体地球、岩石鉱物、地質・地史、大気・海洋、天文の諸分野に関して、実際のデータや写真など、具体的な資料を用いて、我々の住む地球や我々を取り巻く宇宙に関する知見を深め、我々が経験する自然現象がいろいろな法則や原理によって説明できることを学ぶ。扱う範囲は広いが、単に広く浅い知識を修得するのではなく、自らの手で資料を検討することによって少し深い知見も得られるよう進める、また今まに行われている研究についても紹介する。	
		地学実験	地学実験では、地球物理学・天文学・地質鉱物学における基本的事項について修得する。天文学分野では、天文に関する知識を実地の観測結果と結びつけて考察できるようにし、観測者である自分の空間位置を太陽系と恒星の世界の中で把握できるようにすることを目的とする。また地質鉱物学分野では、直接生の岩石や堆積物、化石などに触れることによって地球の歴史や各自の生活の基盤になっている大地の生い立ちを考察できるようになることを目的とする。	共同
キャリア系	キャリアデザインⅠ	就職や人生設計の前提として、「大学生」として大学生活をプランニングする。「基礎ゼミナール」と連携しつつ、「摂南大学」の学生として必要な知識や技能を修得する。専門の学びとの接続となるよう基本的なスタディスキルを修得する。講義と並行して、グループワークを実施し、課題やメンバー構成などの所与の条件に対してグループとして処していく力を養成する。社会の変化を知り、調べ、考え、発表するための技能についての理解を深めることを講義目標とする。		
	キャリアデザインⅡ	現代社会で生じているさまざまな事象を、氾濫する情報からの確にとらえ、それらを起点に思考し、自らの活かし方、伸ばすべきポイントについて考える。将来、就きたい職業を模索し、そのために今何を行うべきかを自ら考え、宣言できるようになることを目指す。講義だけでなく、グループワークや個人で考えるワークを織り交ぜて行い、来るべき就職活動に向けて、自分に必要な能力を自覚し学び、計画を実行に移せるようにする。		

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	キャリア系	数的能力開発	社会に出るにあたり必要とされる数的能力を学修する。社会人として数的能力が必要となる場面は多く、就職活動でも筆記試験で算数・数学はよく使われる。本講義では、将来のキャリア形成に活かせるよう、社会人として必要となる数的能力を高めることを目的とする。自力で解く、講師による解説、類題を解くという流れで、段階的に実践問題に取り組む。さまざまな問題を確実に理解し、解ける力を身につけていく。	
		インターンシップ	インターンシップの目的は、実際の仕事現場の一員として業務を担当することで、そこで働く人々がどのような考え方で働いているのか、特に「1) 仕事の社会における役割」「2) 仕事の成果とは」「3) 仕事の責任と充実感」を直接肌で感じることである。事前学習として、ビジネス組織のあり方、マナーや常識を修得する。インターンシップ先での実習参加の機会を最大限に活用し、自分や社会をより理解し、将来の選択肢や可能性を広げること、職業観の涵養に努めることを目標とする。事後学習も行う。	集中※講義
外国人留学生対象科目		日本事情 F I	年中行事やしきたりなど日常生活に見られる日本の伝統文化から、日本人の価値観や考え方について、体験もまじえながら考察する。日本の年中行事やしきたりについて理解を深め、考察したことや体験を通して学んだことを日本語で表現する力を身につける。日本文化・社会と自国の文化・社会及び他国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できるようになることを目標とする。	
		日本事情 F II	日本文化・社会について、日本映画を視聴して観察したり考察したりする。また、映画の台詞や使われている場面から日本語の文法や表現についても学ぶ。日本文化・社会について観察し、自国の文化・社会及び他の受講生の国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できることを目標とする。映画についての情報・その他背景知識についてまず説明し、映画の場面をいくつか視聴する中で内容理解・練習問題・その他の各種タスク問題を出し、テーマについてディスカッションをした後、「書く」練習を行う。	
		日本語読解 F I	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。読んだ内容を要約したり、口頭で説明する練習を行うことで、語彙力を向上させる。	
		日本語読解 F II	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。読んだ内容を要約し、口頭で説明する練習を行う。語彙力を向上させ、専門分野の文章を読むための読解力の基礎を身につける。	
		日本語文法 F I	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回、講義テーマを決め、教員による解説と練習を繰り返しながら進め、中上級～上級の文法項目が運用できるようになることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	外国人留学生対象科目	日本語文法 F II	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回、講義テーマを決め、教員による解説と練習を繰り返しながら進め、高度な日本語運用能力を身につけることを目標とする。	
		日本語表現作文 F I	本講義ではレポートや論文の基礎を学び、レポート・論文の文体と書き方を身につけることを目指す。レポートや論文の書き方について解説し、書く練習を行う。「①レポート・論文の文体で書ける」「②読んだ内容を要約できる」「③段落分けして書ける」「④経過説明、分類、定義など、書きたい内容に合う表現を使って書ける」「⑤信頼性の高い資料を集め、ルールを守って引用できるようになる」ことを目標とする。	
		日本語表現作文 F II	本講義では、実際にレポートを作成することを通し、レポート・論文の書き方を守ってレポートが作成できるようになることを目指す。テーマを決め、実際にレポートを作成していく。「①レポート・論文の文体で書ける」「②レポート・論文の書き方を守って書ける」「③アウトラインに沿って書ける」「④信頼性の高い資料を集められる」ことを目標とする。	
		日本語総合 F I	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。JLPTのN1に合格していない場合には、その対策も行なう。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。	
		日本語総合 F II	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。JLPTのN1に合格していない場合には、その対策も行なう。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。実際に日本社会で使用されている生教材を使って速読を行ない、できるだけ速く、自分に必要な情報を読み取る練習をする。	
		専門日本語 F I	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。本科目では、Eメールの書き方、自己PRの書き方、話の展開のさせ方を扱い、解説と練習を中心に進める。相手との関係、伝達内容、使用媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目標とする。	
		専門日本語 F II	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。ビジネス場面で使用する日本語表現、異文化ビジネスコミュニケーションについて学ぶ。用意した資料及びタスクシートをもとに講義、ディスカッション等を行う。ビジネス日本語・ビジネスマナー・日本の会社についての知識を得ることによって、日本での就職活動及び就職に必要な知識やスキルを身につけることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	外国人留学生対象科目	日本語会話F I	講義を理解する際に役立つメモの取り方を学ぶと同時に、アカデミック場面における口頭発表のスキルを養う。さまざまなテーマに関する話を聞き、聞きとった内容をメモした後、その内容について発表する。「①まとまりのある話を聞いて、適切にメモを取ることができる」「②適切な表現を用いて、論理的かつわかりやすい発表ができる」ようになることを目指す。	
		日本語会話F II	日本・国際社会におけるさまざまな問題や話題について日本語で議論する能力を伸ばす。さまざまな問題・話題に関するニュース等を見て、話し合う方法で進める。また、コースの後半は学生各自が興味のある話題を持ち寄って、話し合う方法をとる。社会的な話題について、日本語で論理的に意見を述べるができるようになることを目指す。	
	帰国学生対象科目	日本事情R I	年中行事やしきたりなど日常生活に見られる日本の伝統文化から、日本人の価値観や考え方について、体験もまじえながら考察する。用意したスライドやプリントに沿って、テーマについて学び、講義後に理解度の確認小テストを行う。その後、クラス全体でフィードバックを実施する。体験で学んだことはレポートを作成し、学生同士で意見交換を行う。異文化理解を深め、異文化に対する柔軟な見方、態度を養い、日本語の表現能力(技術)を高めることを目指す。	
		日本事情R II	日本文化・社会について、日本映画を視聴して観察したり考察したりする。また、映画の台詞や使われている場面から日本語の文法や表現についても学ぶ。各映画について、まず映画についての情報・その他背景知識について説明し、映画の場面をいくつか視聴する。その後、内容理解・練習問題・その他の各種タスク問題を行い、テーマについてディスカッションした後、「書く」練習をする。日本文化・社会について観察し、自国の文化・社会及び他の受講生の国の文化・社会と比較考察し、様々なテーマについて日本語で自分の考えが表現できることを目標とする。	
		日本語読解R	本講義では様々な分野の一般書を読み、内容を文章にまとめたり、口頭で説明したりすることを通して理解を深めながら読解力の向上を目指す。また、読解を通して語彙力アップを図るとともに、文章を音読することによって漢字の読みに強くなることを目指す。各自で文章を読んだ後、音読し、漢字の読みを確認する。その後、内容を確認する。また、読んだ内容を要約したり、口頭で説明する練習を行う。専門分野の文章を読むための読解力の基礎を身につけることを目標とする。	
		日本語文法R	本講義では、中上級～上級の文法項目を取り上げる。文法項目の用法を確認し、その文法項目が使われている会話を聞いたり、作文や会話をしたりすることを通して、適切に使えるようになることを目指す。各回テーマを設け、解説と練習を繰り返しながら進める。中上級～上級の文法項目が運用でき、高度な日本語運用能力を身につけることを目標とする。	
		日本語表現作文R	本講義ではレポートや論文の基礎を学び、レポート・論文の文体と書き方を身につけることを目指す。レポートや論文の書き方について解説し、書く練習を行う。「①レポート・論文の文体で書ける」「②読んだ内容を要約できる」「③段落分けして書ける」「④経過説明、分類、定義など、書きたい内容に合う表現を使って書ける」「⑤信頼性の高い資料を集め、ルールを守って引用できる」ようになることを目標とする。	

科目区分		授業科目の名称	講義等の内容	備考
教養科目	帰国学生対象科目	日本語総合R	本講義では「①まとまった内容の文章から必要な情報を読み取る」「②まとまった内容の文章の大意を把握する」「③できるだけ速く①と②をできるようにする」ことを目標とする。実際に日本社会で使用されている生教材を使って、速読を行ない、できるだけ速く、自分に必要な情報を読み取るための練習をする。日常生活に必要な文章から、大学生活において求められるレベルのある程度専門性のある文章まで、レベルの異なる文章をできるだけ速く読み、自分に必要な情報を読み取れるようになることを目指す。	
		専門日本語R	相手との関係や話す・書く目的、使用する媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目指す。Eメールの書き方、自己PRの書き方、話の展開のさせ方を扱い、解説と練習を中心に進める。相手との関係、伝達内容、使用媒体に応じた適切な話し方・書き方ができるようになることを目標とする。	
		日本語会話R	日本・国際社会におけるさまざまな問題や話題について日本語で議論する能力を伸ばす。さまざまな問題・話題に関するニュース等を見て、話し合う方法で進める。また、後半は学生各自が興味のある話題を持ち寄って、話し合う方法をとる。社会的な話題について、日本語で論理的に意見を述べるようになることを目指す。	